



Red Hat Decision Manager 7.5

Red Hat OpenShift Container Platform への
Red Hat Decision Manager 試用環境のデプロイ

Red Hat Decision Manager 7.5 Red Hat OpenShift Container Platform への Red Hat Decision Manager 試用環境のデプロイ

Red Hat Customer Content Services
brms-docs@redhat.com

法律上の通知

Copyright © 2019 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

本書では、Red Hat OpenShift Container Platform に Red Hat Decision Manager 7.5 試用環境をデプロイする方法を説明します。

目次

前書き	3
第1章 RED HAT OPENSIFT CONTAINER PLATFORM における RED HAT DECISION MANAGER の概要	4
第2章 イメージストリームとイメージレジストリーが利用可能であることの確認	6
第3章 試用環境のデプロイ	8
第4章 OPENSIFT テンプレートの参考資料	10
4.1. RHDM75-TRIAL-EPHEMERAL.YAML テンプレート	10
4.1.1. パラメーター	10
4.1.2. オブジェクト	23
4.1.2.1. サービス	23
4.1.2.2. ルート	24
4.1.2.3. デプロイメント設定	24
4.1.2.3.1. トリガー	24
4.1.2.3.2. レプリカ	24
4.1.2.3.3. Pod テンプレート	24
4.1.2.3.3.1. サービスアカウント	25
4.1.2.3.3.2. イメージ	25
4.1.2.3.3.3. Readiness プローブ	25
4.1.2.3.3.4. Liveness プローブ	25
4.1.2.3.3.5. 公開されたポート	25
4.1.2.3.3.6. イメージの環境変数	26
4.1.2.4. 外部の依存関係	43
4.1.2.4.1. シークレット	43
4.2. OPENSIFT の使用に関するクイックリファレンス	43
付録A バージョン情報	46

前書き

システムエンジニアは、Red Hat OpenShift Container Platform に Red Hat Decision Manager 試用環境をデプロイして、ルールやその他のビジネスアセットの開発や使用を評価し、体験することができます。

前提条件

- Red Hat OpenShift Container Platform バージョン 3.11 がデプロイされている。
- OpenShift クラスター/namespace で 3 ギガバイト以上のメモリーが利用可能である。
- デプロイメントに使用する OpenShift プロジェクトが作成されている。
- **oc** コマンドを使用してプロジェクトにログインしている。**oc** コマンドランツールに関する詳細は、『OpenShift CLI リファレンス』を参照してください。OpenShift Web コンソールを使用してテンプレートをデプロイするには、Web コンソールを使用してログインする必要があります。



注記

Red Hat Decision Manager バージョン 7.5 以降、Automation Broker (Ansible Playbook) や全テンプレートを使用したインストールを含む、Red Hat OpenShift Container Platform 3.x へのサポートが非推奨になりました。新機能が追加されない可能性があり、この機能は今後のリリースで削除予定です。

第1章 RED HAT OPENSIFT CONTAINER PLATFORM における RED HAT DECISION MANAGER の概要

Red Hat Decision Manager は、Red Hat OpenShift Container Platform 環境にデプロイすることができます。

この場合、Red Hat Decision Manager のコンポーネントは、別々の OpenShift Pod としてデプロイされます。各 Pod のスケールアップおよびスケールダウンを個別に行い、特定のコンポーネントに必要な数だけコンテナを提供できます。OpenShift の標準的な方法を使用して Pod を管理し、負荷を分散できます。

以下の Red Hat Decision Manager の主要コンポーネントが OpenShift で利用できます。

- Decision Server (実行サーバー (**Execution Server**) または **KIE Server** と呼ばれる) は、デジジョンサービスおよびその他のデプロイ可能なアセット (サービス と総称される) を実行するインフラストラクチャー要素です。サービスの全ロジックは実行サーバーで実行されます。Decision Server Pod をスケールアップして、同一または異なるホストで実行するコピーを必要な数だけ提供できます。Pod をスケールアップまたはスケールダウンすると、そのコピーはすべて同じサービスを実行します。OpenShift には負荷分散機能があり、要求はいずれかの Pod で処理されます。

Decision Server Pod を個別にデプロイし、サービスの異なるグループを実行することができます。この Pod もスケールアップやスケールダウンが可能です。複製された個別の Decision Server Pod を必要な数だけ設定することができます。

- Business Central は、オーサリングサービスに使用される Web ベースのインタラクティブな環境です。Business Central は管理コンソールも提供します。Business Central を使用してサービスを開発し、それらを Decision Server にデプロイできます。Business Central は一元化されたアプリケーションですが、高可用性を確保できるように設定でき、複数の Pod を実行し、同一データを共有できます。

Business Central には、サービスの開発に使用するサービスのソースを保持する Git リポジトリとビルドイン Maven リポジトリが含まれます。設定に応じて、Business Central はコンパイルしたサービス (KJAR ファイル) をビルドイン Maven リポジトリに配置することも、(設定されている場合) 外部 Maven リポジトリに配置することもあります。



重要

現在のバージョンでは、高可用性の Business Central 機能はテクノロジープレビュー機能となっています。Red Hat のテクノロジープレビュー機能についての詳細は、「[テクノロジープレビュー機能のサポート範囲](#)」を参照してください。

これらのコンポーネントおよびその他のコンポーネントを OpenShift 内の各種の環境設定に配置できます。

以下は、通常的环境タイプです。

- オーサリングまたは管理環境: Business Central を使用してサービスを作成および変更し、サービスを Decision Server で実行するために使用できる環境アーキテクチャーです。この環境は、オーサリング用の Business Central を提供する Pod と、サービス実行用の 1 つ以上の Decision Server を提供する Pod で構成されます。それぞれの Decision Server が 1 つの Pod となり、Pod はスケールアップまたはスケールダウンを随時実行して複製できます。Business Central を使用して、それぞれの Decision Server でサービスをデプロイしたり、デプロイ解除したりす

ることができます。この環境をデプロイする方法については、『[Red Hat OpenShift Container Platform への Red Hat Decision Manager オーサリングまたは管理サーバー環境のデプロイ](#)』を参照してください。

- イミュータブルサーバーを使用するデプロイメント: ステージングおよび実稼働目的で既存のサービスを実行するための代替の環境です。この環境では、Decision Server Pod のデプロイ時に、サービスまたはサービスのグループをロードし、起動するイメージをビルドします。この Pod でサービスを停止したり、新しいサービスを追加したりすることはできません。サービスの別のバージョンを使用したり、別の方法で設定を変更する必要がある場合は、新規のサーバーイメージをデプロイして、古いサーバーと入れ替えます。このシステムでは、Decision Server は OpenShift 環境の Pod のように実行されるので、任意のコンテナベースの統合ワークフローを使用することができ、他のツールを使用して Pod を管理する必要はありません。この環境のデプロイメント手順については、『[Red Hat OpenShift Container Platform への Red Hat Decision Manager イミュータブルサーバー環境のデプロイ](#)』を参照してください。

試用または評価環境をデプロイすることも可能です。この環境には、Business Central と Decision Server が含まれます。この環境はすばやく設定でき、これを使用して、アセットの開発や実行を評価し、体験できます。ただし、この環境では永続ストレージを使用せず、この環境でのいずれの作業も保存されません。この環境のデプロイ方法については、『[Red Hat OpenShift Container Platform への Red Hat Decision Manager 試用環境のデプロイ](#)』を参照してください。

Red Hat Decision Manager 環境を OpenShift にデプロイするには、Red Hat Decision Manager で提供される OpenShift テンプレートを使用できます。

第2章 イメージストリームとイメージレジストリーが利用可能であることの確認

Red Hat Decision Manager コンポーネントを Red Hat OpenShift Container Platform にデプロイするには、OpenShift が Red Hat レジストリーから適切なイメージをダウンロードできることを確認する必要があります。これらのイメージをダウンロードするために、OpenShift ではイメージの場所情報が含まれるイメージストリームが必要になります。また、OpenShift は、お使いのサービスアカウントのユーザー名とパスワードを使用して Red Hat レジストリーで認証できるように設定する必要があります。

OpenShift 環境のバージョンによっては、必要なイメージストリームが含まれている場合があります。イメージストリームが提供されているかどうかを確認する必要があります。デフォルトでイメージストリームが OpenShift に含まれている場合には、OpenShift インフラストラクチャーがレジストリー認証サーバー用に設定されているのであれば、使用できます。管理者は、OpenShift 環境のインストール時に、レジストリーの認証設定を完了する必要があります。

それ以外の方法として、レジストリー認証を独自のプロジェクトで設定し、イメージストリームをそのプロジェクトにインストールすることができます。

手順

1. Red Hat OpenShift Container Platform が Red Hat レジストリーへのアクセス用のユーザー名とパスワードで設定されているかどうかを判別します。必須の設定に関する詳細は、「[レジストリーの場所の設定](#)」を参照してください。OpenShift Online サブスクリプションを使用している場合は、Red Hat レジストリーへのアクセス用の設定はすでに行われています。
2. Red Hat OpenShift Container Platform が Red Hat レジストリーへのアクセス用のユーザー名とパスワードで設定されている場合は、以下のコマンドを実行します。

```
$ oc get imagestreamtag -n openshift | grep rhdm75-decisioncentral-openshift
$ oc get imagestreamtag -n openshift | grep rhdm75-kieserver-openshift
```

両方のコマンドの出力が空でない場合、必要なイメージストリームは **openshift** namespace で利用可能な状態であるため、追加の操作は必要ありません。

3. コマンドのいずれかまたは両方の出力が空の場合や、OpenShift が Red Hat レジストリーへのアクセス用のユーザー名とパスワードで設定されていない場合には、以下の手順を実行してください。
 - a. **oc** コマンドで OpenShift にログインしており、プロジェクトがアクティブであることを確認します。
 - b. 「[Registry Service Accounts for Shared Environments](#)」に記載されている手順を実行します。Red Hat カスタマーポータルにログインし、このドキュメントにアクセスし、レジストリーサービスアカウントを作成する手順を実行する必要があります。
 - c. **OpenShift Secret** タブを選択し、**Download secret** のリンクをクリックして、YAML シークレットファイルをダウンロードします。
 - d. ダウンロードしたファイルを確認して、**name:** エントリーに一覧表示されている名前をメモします。
 - e. 以下のコマンドを実行します。

```
oc create -f <file_name>.yaml
oc secrets link default <secret_name> --for=pull
oc secrets link builder <secret_name> --for=pull
```

<file_name> はダウンロードしたファイルの名前に、<secret_name> はファイルの **name:** のエントリーに記載されている名前に置き換えてください。

- f. [Software Downloads](#) ページから **rhdm-7.5.0-openshift-templates.zip** の製品配信可能ファイルをダウンロードし、**rhdm75-image-streams.yaml** ファイルを展開します。
- g. 以下のコマンドを入力します。

```
$ oc apply -f rhdm75-image-streams.yaml
```



注記

上記の手順を完了したら、イメージストリームをプロジェクトの namespace にインストールします。この場合、テンプレートをデプロイする際に **IMAGE_STREAM_NAMESPACE** パラメーターをこのプロジェクトの名前に設定する必要があります。

第3章 試用環境のデプロイ

試用版 (評価版) の Red Hat Decision Manager 環境をデプロイできます。この環境は、サービスのオーサリングと管理を行うための Business Central とサービスのテスト実行のための Decision Server で構成されます。

この環境には永続ストレージが含まれておらず、試用版の環境で作成または変更するアセットは保存されません。

この環境は、テストおよびデモ用のアクセスを前提として設計されており、CORS (Cross-Origin Resource Sharing) をサポートします。つまり、ページ上の他のリソースが他のサーバーによって提供される際、Decision Server エンドポイントはブラウザを使用してアクセスされることを意味します。Decision Server エンドポイントは基本的に REST 呼び出し用として設計されていますが、一部のデモ設定ではブラウザによるアクセスが必要になる場合があります。

最小限の手順のみが必要となり、必須となる設定はなく、パスワードはすべて1つの値 (デフォルトパスワードは **RedHat**) に設定されます。

単一オーサリング環境をデプロイするには、**rhdm75-trial-ephemeral.yaml** テンプレートファイルを使用します。**rhdm-7.5.0-openshift-templates.zip** の製品配信可能ファイルからこのファイルを展開できます。このファイルは、Red Hat カスタマーポータルの [Software Downloads](#) ページからダウンロードできます。

手順

1. 以下のいずれかの方法を使用してテンプレートをデプロイします。

- OpenShift Web UI で、**Add to Project** → **Import YAML / JSON**を選択してから、**rhdm75-trial-ephemeral.yaml** ファイルを選択するか、またはこれを貼り付けます。**Add Template** ウィンドウで、**Process the template** が選択されていることを確認し、**Continue** をクリックします。
- OpenShift コマンドラインコンソールを使用するには、以下のコマンドラインを準備します。

```
oc new-app -f <template-path>/rhdm75-trial-ephemeral.yaml
```

このコマンドラインでは、**<template-path>** を、ダウンロードしたテンプレートファイルのパスに置き換えます。

2. オプションで、このテンプレートに記載されているいずれかのパラメーターを設定します。通常の試用版のデプロイメントでは、以下のパラメーターのみが必要になります。
 - **ImageStream Namespace (IMAGE_STREAM_NAMESPACE)**: イメージストリームが利用可能な namespace。OpenShift 環境でイメージストリームがすでに利用可能な場合 ([2章 イメージストリームとイメージレジストリーが利用可能であることの確認](#)を参照)、namespace は **openshift** になります。イメージストリームファイルをインストールしている場合、namespace は OpenShift プロジェクトの名前になります。
3. 使用している方法に従って環境の作成を完了します。
 - OpenShift Web UI で、**Create** をクリックします。
 - **This will create resources that may have security or project behavior implications** というポップアップメッセージが表示される可能性があります。このメッセージが表示される場合には、**Create Anyway** をクリックします。

- 完了し、コマンドラインを実行します。

第4章 OPENSIFT テンプレートの参考資料

Red Hat Decision Manager は以下の OpenShift テンプレートを提供します。テンプレートにアクセスするには、Red Hat カスタマーポータルの [Software Downloads](#) ページから、**rhdm-7.5.0-openshift-templates.zip** の製品配信可能ファイルをダウンロードし、これを展開します。

- **rhdm75-trial-ephemeral.yaml** は、Business Central および Business Central に接続された Decision Server を提供します。この環境では、永続ストレージのない一時的な設定を使用します。このテンプレートについての詳細は、「[rhdm75-trial-ephemeral.yaml テンプレート](#)」を参照してください。

4.1. RHDM75-TRIAL-EPHEMERAL.YAML テンプレート

Red Hat Decision Manager 7.5 の一時オーサリングおよびテスト環境向けのアプリケーションテンプレート (非推奨)

4.1.1. パラメーター

テンプレートを使用すると、値を取るパラメーターを定義できます。この値は、パラメーターが参照される際に置き換えられます。参照はオブジェクト一覧フィールドの任意のテキストフィールドで定義できます。詳細情報は、[Openshift ドキュメント](#)を参照してください。

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
APPLICATION_NAME	–	アプリケーションの名前	myapp	True
DEFAULT_PASSWORD	KIE_ADMIN_PASSWORD	試用版環境でユーザーが簡単に使用できるように用意された、複数コンポーネントに使用されるデフォルトのパスワード	RedHat	True
KIE_ADMIN_USER	KIE_ADMIN_USER	KIE 管理者のユーザー名	adminUser	False
KIE_SERVER_USER	KIE_SERVER_USER	KIE Server のユーザー名 (org.kie.server.user システムプロパティを設定します)	executionUser	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
KIE_SERVER_BYPASS_AUTH_USER	KIE_SERVER_BYPASS_AUTH_USER	KIE Server による、クエリーなどのタスク関連の操作についての認証済みユーザーのバイパスを許可 (org.kie.server.bypass.auth.user システムプロパティを設定します)	false	False
KIE_SERVER_CONTROLLER_USER	KIE_SERVER_CONTROLLER_USER	KIE Server コントローラーのユーザー名 (org.kie.server.controller.user システムプロパティを設定します)	controllerUser	False
KIE_SERVER_MODE	KIE_SERVER_MODE	KIE Server モード。有効な値は 'DEVELOPMENT' または 'PRODUCTION' です。実稼働モードでは、アーティファクトの SNAPSHOT バージョンを KIE サーバーにデプロイできず、既存コンテナでアーティファクトのバージョンを変更することはできません (org.kie.server.mode システムプロパティを設定します)。	DEVELOPMENT	False
KIE_MBEANS	KIE_MBEANS	KIE サーバー mbeans の有効化/無効化 (kie.mbeans and kie.scanner.mbeans システムプロパティを設定します)	enabled	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
DROOLS_SERVER_FILTER_CLASSES	DROOLS_SERVER_FILTER_CLASSES	KIE Server クラスフィルター (org.drools.server.filter.classes システムプロパティを設定します)	true	False
PROMETHEUS_SERVER_EXT_DISABLED	PROMETHEUS_SERVER_EXT_DISABLED	false に設定されている場合、Prometheus サーバーの拡張は有効にされません (org.kie.prometheus.server.ext.disabled システムプロパティを設定します)。	false	False
KIE_SERVER_HOSTNAME_HTTP	HOSTNAME_HTTP	http サービスルートのカスタムホスト名。デフォルトホスト名の場合は空白のままにします (例: insecure- <application-name>-kieserver- <project>.<default-domain-suffix>)。	—	False
KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_ORIGIN	AC_ALLOW_ORIGIN_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Origin 応答ヘッダーの値を設定します (CORS サポートに役立ちます)。	*	False
KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_METHODS	AC_ALLOW_METHODS_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Methods 応答ヘッダーの値を設定します (CORS サポートに役立ちます)。	GET、POST、 OPTIONS、PUT	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_HEADERS	AC_ALLOW_HEADERS_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Headers 応答ヘッダーの値を設定します (CORS サポートに役立ちます)。	Accept、Authorization、Content-Type、X-Requested-With	False
KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_CREDENTIALS	AC_ALLOW_CREDENTIALS_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Credentials 応答ヘッダーの値を設定します (CORS サポートに役立ちます)。	true	False
KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_MAX_AGE	AC_MAX_AGE_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE	KIE サーバーの Access-Control-Max-Age 応答ヘッダーの値を設定します (CORS サポートに役立ちます)。	1	False
DECISION_CENTRAL_HOSTNAME_HTTP	HOSTNAME_HTTP	http サービスのホスト名。デフォルトホスト名の場合は空白にします (例: insecure- <application-name>-rhdmcentr- <project>.<default-domain-suffix>)。	–	False
KIE_SERVER_CONTROLLER_OPENSHIFT_GLOBAL_DISCOVERY_ENABLED	KIE_SERVER_CONTROLLER_OPENSHIFT_GLOBAL_DISCOVERY_ENABLED	true に設定すると、KIE Server のグローバル検出機能はオンになります (org.kie.server.controller.openshift.global.discovery.enabled システムプロパティを設定します)。	false	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
KIE_SERVER_CONTROLLER_OPENSHIFT_PREFER_KIESERVICE_SERVICE	KIE_SERVER_CONTROLLER_OPENSHIFT_PREFER_KIESERVICE_SERVICE	Business Central の OpenShift 統合がオンの場合、このパラメーターを true に設定すると、OpenShift 内部サービスエンドポイント経由での KIE Server への接続が有効になります (org.kie.server.controller.openshift.prefer.kieservice.service システムプロパティを設定します)。	true	False
KIE_SERVER_CONTROLLER_TEMPLATE_CACHE_TTL	KIE_SERVER_CONTROLLER_TEMPLATE_CACHE_TTL	KIE ServerTemplate Cache TTL (ミリ秒単位) (org.kie.server.controller.template.cache.ttl システムプロパティを設定します)。	60000	False
IMAGE_STREAM_NAMESPACE	–	Red Hat Decision Manager イメージの ImageStream がインストールされている namespace。これらの ImageStreams は通常 OpenShift の namespace にインストールされています。ImageStreams を別の namespace/プロジェクトにインストールしている場合には、これを変更するだけで結構です。	openshift	True

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
KIE_SERVER_IMAGE_STREAM_NAME	–	KIE Server に使用するイメージストリームの名前。デフォルトは「rhdm-kieserver-rhel8」です。	rhdm-kieserver-rhel8	True
IMAGE_STREAM_TAG	–	イメージストリーム内のイメージへの名前付きのポインター。デフォルトは「7.5.0」です。	7.5.0	True
KIE_SERVER_CONTAINER_DEPLOYMENT	KIE_SERVER_CONTAINER_DEPLOYMENT	KIE Server コンテナのデプロイメント設定。オプションでエイリアスあり (形式: containerId=groupId:artifactId:version c2(alias2)=g2:a2:v2)	–	False
MAVEN_REPO_ID	MAVEN_REPO_ID	maven リポジトリに使用する id (設定されている場合)。デフォルトはランダムに生成されます。	repo-custom	False
MAVEN_REPO_URL	MAVEN_REPO_URL	Maven リポジトリまたはサービスへの完全修飾 URL	http://nexus.nexus-project.svc.cluster.local:8081/nexus/content/groups/public/	False
MAVEN_REPO_USERNAME	MAVEN_REPO_USERNAME	Maven リポジトリにアクセスするユーザー名 (必要な場合)	–	False
MAVEN_REPO_PASSWORD	MAVEN_REPO_PASSWORD	Maven リポジトリにアクセスするパスワード (必要な場合)	–	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
DECISION_CENTRAL_MAVEN_USERNAME	KIE_MAVEN_USER	EAP 内の Decision Central がホストする Maven サービスにアクセスするためのユーザー名	mavenUser	True
GIT_HOOKS_DIR	GIT_HOOKS_DIR	git フックに使用するディレクトリー (必要な場合)	/opt/kie/data/git/hooks	False
DECISION_CENTRAL_MEMORY_LIMIT	–	Decision Central コンテナのメモリー制限	2Gi	False
KIE_SERVER_MEMORY_LIMIT	–	KIE サーバーコンテナのメモリー制限	1Gi	False
SSO_URL	SSO_URL	RH-SSO URL	https://rh-sso.example.com/auth	False
SSO_REALM	SSO_REALM	RH-SSO レルム名	–	False
DECISION_CENTRAL_SSO_CLIENT	SSO_CLIENT	Decision Central RH-SSO クライアント名	–	False
DECISION_CENTRAL_SSO_SECRET	SSO_SECRET	Decision Central RH-SSO クライアントシークレット	252793ed-7118-4ca8-8dab-5622fa97d892	False
KIE_SERVER_SSO_CLIENT	SSO_CLIENT	KIE Server RH-SSO クライアント名	–	False
KIE_SERVER_SSO_SECRET	SSO_SECRET	KIE Server RH-SSO クライアント名	252793ed-7118-4ca8-8dab-5622fa97d892	False
SSO_USERNAME	SSO_USERNAME	クライアント作成に使用する RH-SSO レルムの管理者ユーザー名 (存在しない場合)	–	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
SSO_PASSWORD	SSO_PASSWORD	クライアント作成に使用する RH-SSO レルムの管理者パスワード	–	False
SSO_DISABLE_SSL_CERTIFICATE_VALIDATION	SSO_DISABLE_SSL_CERTIFICATE_VALIDATION	RH-SSO Disable SSL 証明書の検証	false	False
SSO_PRINCIPAL_ATTRIBUTE	SSO_PRINCIPAL_ATTRIBUTE	ユーザー名として使用する RH-SSO プリンシパル属性	preferred_username	False
AUTH_LDAP_URL	AUTH_LDAP_URL	認証用に接続する LDAP エンドポイント	ldap://myldap.example.com	False
AUTH_LDAP_BIND_DN	AUTH_LDAP_BIND_DN	認証に使用するバインド DN	uid=admin,ou=users,ou=example,ou=com	False
AUTH_LDAP_BIND_CREDENTIAL	AUTH_LDAP_BIND_CREDENTIAL	認証に使用する LDAP 認証情報	Password	False
AUTH_LDAP_JAAS_SECURITY_DOMAIN	AUTH_LDAP_JAAS_SECURITY_DOMAIN	パスワードの復号化に使用する JaasSecurityDomain の JMX ObjectName	–	False
AUTH_LDAP_BASE_CTX_DN	AUTH_LDAP_BASE_CTX_DN	ユーザー検索の開始に使用する最上位コンテキストの LDAP ベース DN	ou=users,ou=example,ou=com	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
AUTH_LDAP_BASE_FILTER	AUTH_LDAP_BASE_FILTER	認証するユーザーのコンテキストの検索に使用する LDAP 検索フィルター。{0} 式を使用しているフィルターに、入力ユーザー名またはログインモジュールコールバックから取得される userDN が置換されます。検索フィルターの一般的な例は (uid={0}) です。	(uid={0})	False
AUTH_LDAP_SEARCH_SCOPE	AUTH_LDAP_SEARCH_SCOPE	使用する検索範囲。	SUBTREE_SCOPE	False
AUTH_LDAP_SEARCH_TIME_LIMIT	AUTH_LDAP_SEARCH_TIME_LIMIT	ユーザーまたはロール検索のタイムアウト (ミリ秒単位)。	10000	False
AUTH_LDAP_DISTINGUISHED_NAME_ATTRIBUTE	AUTH_LDAP_DISTINGUISHED_NAME_ATTRIBUTE	ユーザーの DN を含むユーザーエントリーの属性の名前。これは、ユーザー自身の DN に正しいユーザーマッピングを妨げる特殊文字 (バックスラッシュなど) が含まれる場合に必要になることがあります。属性が存在しない場合は、エントリーの DN が使用されます。	distinguishedName	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
AUTH_LDAP_PARSE_USERNAME	AUTH_LDAP_PARSE_USERNAME	DN がユーザー名に対して解析されるかどうかを示すフラグ。true に設定されている場合には、DN はユーザー名に対して解析されます。false に設定されている場合には、DN はユーザー名に対して解析されません。このオプションは <code>usernameBeginString</code> および <code>usernameEndString</code> と共に使用されます。	true	False
AUTH_LDAP_USERNAME_BEGIN_STRING	AUTH_LDAP_USERNAME_BEGIN_STRING	ユーザー名を公開するため、DN の最初から削除される文字列を定義します。このオプションは <code>usernameEndString</code> と併用され、 <code>parseUsername</code> が true に設定されている場合にのみ考慮されます。	—	False
AUTH_LDAP_USERNAME_END_STRING	AUTH_LDAP_USERNAME_END_STRING	ユーザー名を公開するため、DN の最後から削除される文字列を定義します。このオプションは <code>usernameEndString</code> と合わせて使用し、 <code>parseUsername</code> が true に設定されている場合にのみ考慮されます。	—	False
AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_ID	AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_ID	ユーザーロールを含む属性の名前	memberOf	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
AUTH_LDAP_ROLES_CTX_DN	AUTH_LDAP_ROLES_CTX_DN	ユーザーロールを検索するコンテキストの固定 DN。これは、実際のロールが存在する DN ではなく、ユーザーロールを含むオブジェクトが存在する DN です。たとえば、Microsoft Active Directory サーバーでは、これは、ユーザーアカウントが存在する DN です。	ou=groups,ou=example,ou=com	False
AUTH_LDAP_ROLE_FILTER	AUTH_LDAP_ROLE_FILTER	認証済みユーザーと関連付けられたロールを検索するために使用される検索フィルター。入力ユーザー名またはログインモジュールコールバックから取得される userDN は、{0} 式が使用されたフィルターに置換されます。認証済み userDN は {1} が使用されたフィルターに置換されます。入力ユーザー名に一致する検索フィルター例は (member={0}) です。認証済み userDN に一致する他の例は (member={1}) です。	(memberOf={1})	False
AUTH_LDAP_ROLE_RECURSION	AUTH_LDAP_ROLE_RECURSION	一致するコンテキストの下で実行されるロール検索の再帰レベルの数。再帰を無効にするには、これを 0 に設定します。	1	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
AUTH_LDAP_DEFAULT_ROLE	AUTH_LDAP_DEFAULT_ROLE	認証されたすべてのユーザーについての組み込まれているロール	user	False
AUTH_LDAP_ROLE_NAME_ATTRIBUTE_ID	AUTH_LDAP_ROLE_NAME_ATTRIBUTE_ID	ロール名を含む roleCtxDN コンテキスト内の属性の名前。 roleAttributeIDs プロパティが true に設定されている場合には、このプロパティはロールオブジェクトの名前属性の検索に使用されません。	name	False
AUTH_LDAP_PARSE_ROLE_NAME_FROM_DN	AUTH_LDAP_PARSE_ROLE_NAME_FROM_DN	クエリーによって返された DN に roleNameAttributeID が含まれるかどうかを示すフラグ。true に設定されている場合には、DN は roleNameAttributeID に対してチェックされます。false に設定されている場合、DN は roleNameAttributeID に対してチェックされません。このフラグは LDAP クエリーのパフォーマンスを向上できます。	false	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_IS_DN	AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_IS_DN	roleAttributeID にロールオブジェクトの完全修飾 DN が含まれるかどうか。false の場合は、コンテキスト名の roleNameAttributeId 属性の値からロール名が取得されます。Microsoft Active Directory などの特定のディレクトリースキーマでは、この属性を true に設定する必要があります。	false	False
AUTH_LDAP_REFERRAL_USE_ROLE_ATTRIBUTE_ID_TO_CHECK	AUTH_LDAP_REFERRAL_USE_ROLE_ATTRIBUTE_ID_TO_CHECK	リファール (referral) を使用しない場合はこのオプションを無視してもかまいません。リファールを使用し、ロールオブジェクトがリファール内にある場合、このオプションは特定のロール (例: member) に対して定義されたユーザーが含まれる属性名を示します。ユーザーはこの属性名の内容に対してチェックされます。このオプションが設定されていないとチェックは常に失敗するため、ロールオブジェクトはリファールツリーに保存できません。	—	False

変数名	イメージの環境変数	説明	値の例	必須
AUTH_ROLE_MAPPER_ROLES_PROPERTIES	AUTH_ROLE_MAPPER_ROLES_PROPERTIES	このパラメーターがある場合には、RoleMapping ログインモジュールが指定したファイルを使用するように設定されます。このパラメーターは、ロールを置換ロールにマップするプロパティファイルまたはリソースの完全修飾ファイルパスまたは名前を定義します。形式は original_role=role1,role2,role3 になります。	–	False
AUTH_ROLE_MAPPER_REPLACE_ROLE	AUTH_ROLE_MAPPER_REPLACE_ROLE	現在のロールを追加するか、マップされたロールに現在のマップを置き換えるか。true に設定されている場合は、置き換えられます。	–	False

4.1.2. オブジェクト

CLI はさまざまなオブジェクトタイプをサポートします。これらのオブジェクトタイプの一覧や略語については、[Openshift ドキュメント](#) を参照してください。

4.1.2.1. サービス

サービスは、Pod の論理セットや、Pod にアクセスするためのポリシーを定義する抽象概念です。詳細は、[コンテナエンジンのドキュメント](#) を参照してください。

サービス	ポート	名前	説明
`\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr	8080	http	すべての Decision Central Web サーバーのポート
`\${APPLICATION_NAME}-kieserver	8080	–	すべての KIE Server Web サーバーのポート

4.1.2.2. ルート

ルートは、**www.example.com** などの外部から到達可能なホスト名を指定してサービスを公開する1つの手段です。ルーターは、定義したルートやサービスで特定したエンドポイントを使用して、外部のクライアントからアプリケーションに名前付きの接続を提供します。各ルートは、ルート名、サービスセクター、セキュリティ設定 (オプション) で構成されます。詳細は、[Openshift ドキュメント](#) を参照してください。

サービス	セキュリティ	ホスト名
insecure- \${APPLICATION_NAME}- rhdmcenr-http	なし	\${DECISION_CENTRAL_HOSTNAME_HTTP}
insecure- \${APPLICATION_NAME}- kieserver-http	なし	\${KIE_SERVER_HOSTNAME_HTTP}

4.1.2.3. デプロイメント設定

OpenShift のデプロイメントは、デプロイメント設定と呼ばれるユーザー定義のテンプレートをベースとするレプリケーションコントローラーです。デプロイメントは手動で作成されるか、またはトリガーされるイベントに対応して作成されます。詳細は、[Openshift ドキュメント](#) を参照してください。

4.1.2.3.1. トリガー

トリガーは OpenShift 内外を問わず、イベントが発生すると新規デプロイメントを作成するように促します。詳細は、[Openshift ドキュメント](#) を参照してください。

デプロイメント	トリガー
\${APPLICATION_NAME}-rhdmcenr	ImageChange
\${APPLICATION_NAME}-kieserver	ImageChange

4.1.2.3.2. レプリカ

レプリケーションコントローラーは、指定した数の Pod の「レプリカ」が一度に実行されるようにします。レプリカが増えると、レプリケーションコントローラーが Pod の一部を強制終了します。レプリカが足りない場合には、追加で起動します。詳細は、[コンテナエンジンのドキュメント](#) を参照してください。

デプロイメント	レプリカ
\${APPLICATION_NAME}-rhdmcenr	1
\${APPLICATION_NAME}-kieserver	1

4.1.2.3.3. Pod テンプレート

4.1.2.3.3.1. サービスアカウント

サービスアカウントは、各プロジェクト内に存在する API オブジェクトです。他の API オブジェクトのように作成し、削除できます。詳細は、[Openshift ドキュメント](#)を参照してください。

デプロイメント	サービスアカウント
<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr</code>	<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmsvc</code>
<code>\${APPLICATION_NAME}-kieserver</code>	<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmsvc</code>

4.1.2.3.3.2. イメージ

デプロイメント	イメージ
<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr</code>	rhdm-decisioncentral-rhel8
<code>\${APPLICATION_NAME}-kieserver</code>	<code>\${KIE_SERVER_IMAGE_STREAM_NAME}</code>

4.1.2.3.3.3. Readiness プローブ

`${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr`

Http Get on `http://localhost:8080/rest/ready`

`${APPLICATION_NAME}-kieserver`

Http Get on `http://localhost:8080/services/rest/server/readycheck`

4.1.2.3.3.4. Liveness プローブ

`${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr`

Http Get on `http://localhost:8080/rest/healthy`

`${APPLICATION_NAME}-kieserver`

Http Get on `http://localhost:8080/services/rest/server/healthcheck`

4.1.2.3.3.5. 公開されたポート

デプロイメント	名前	ポート	プロトコル
<code>\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr</code>	jolokia	8778	TCP
	http	8080	TCP

デプロイメント	名前	ポート	プロトコル
\${APPLICATION_NAME}-kieserver	jolokia	8778	TCP
	http	8080	TCP

4.1.2.3.3.6. イメージの環境変数

デプロイメント	変数名	説明	値の例
\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr	KIE_ADMIN_USER	KIE 管理者のユーザー名	\${KIE_ADMIN_USER}
	KIE_ADMIN_PWD	試用版環境でユーザーが簡単に使用できるように用意された、複数コンポーネントに使用されるデフォルトのパスワード	\${DEFAULT_PASSWORD}
	KIE_MBEANS	KIE サーバー mbeans の有効化/無効化 (kie.mbeans and kie.scanner.mbeans システムプロパティを設定します)	\${KIE_MBEANS}
	KIE_SERVER_CONTROLLER_OPENSHIFT_GLOBAL_DISCOVERY_ENABLED	true に設定すると、KIE Server のグローバル検出機能はオンになります (org.kie.server.controller.openshift.global.discovery.enabled システムプロパティを設定します)。	\${KIE_SERVER_CONTROLLER_OPENSHIFT_GLOBAL_DISCOVERY_ENABLED}
	KIE_SERVER_CONTROLLER_OPENSHIFT_PREFER_KIESERVER_SERVICE	Business Central の OpenShift 統合がオンの場合、このパラメーターを true に設定すると、OpenShift 内部サービスエンドポイント経由での KIE Server への接続が有効になります (org.kie.server.controller.openshift.prefer.kieserver.service システムプロパティを設定します)。	\${KIE_SERVER_CONTROLLER_OPENSHIFT_PREFER_KIESERVER_SERVICE}

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	KIE_SERVER_CONTROLLER_TEMPLATE_CACHE_TTL	KIE ServerTemplate Cache TTL (ミリ秒単位) (org.kie.server.controller.template.cache.ttl システムプロパティを設定します)。	`\${KIE_SERVER_CONTROLLER_TEMPLATE_CACHE_TTL}`
	KIE_WORKBENCH_CONTROLLER_OPENSIFT_ENABLED	–	true
	KIE_SERVER_CONTROLLER_USER	KIE Server コントローラーのユーザー名 (org.kie.server.controller.user システムプロパティを設定します)	`\${KIE_SERVER_CONTROLLER_USER}`
	KIE_SERVER_CONTROLLER_PWD	試用版環境でユーザーが簡単に使用できるように用意された、複数コンポーネントに使用されるデフォルトのパスワード	`\${DEFAULT_PASSWORD}`
	KIE_SERVER_USER	KIE Server のユーザー名 (org.kie.server.user システムプロパティを設定します)	`\${KIE_SERVER_USER}`
	KIE_SERVER_PWD	試用版環境でユーザーが簡単に使用できるように用意された、複数コンポーネントに使用されるデフォルトのパスワード	`\${DEFAULT_PASSWORD}`
	WORKBENCH_ROUTE_NAME	–	`\${APPLICATION_NAME}-rhdmcenr`
	MAVEN_REPO_ID	maven リポジトリに使用する id (設定されている場合)。デフォルトはランダムに生成されません。	`\${MAVEN_REPO_ID}`
	MAVEN_REPO_URL	Maven リポジトリまたはサービスへの完全修飾 URL	`\${MAVEN_REPO_URL}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	MAVEN_REPO_USE RNAME	Maven リポジトリに アクセスするユーザー名 (必要な場合)	`\${MAVEN_REPO_US ERNAME}`
	MAVEN_REPO_PAS SWORD	Maven リポジトリに アクセスするパスワード (必要な場合)	`\${MAVEN_REPO_PA SSWORD}`
	KIE_MAVEN_USER	EAP 内の Decision Central がホストする Maven サービスにアク セスするためのユーザー 名	`\${DECISION_CENTR AL_MAVEN_USERN AME}`
	KIE_MAVEN_PWD	試用版環境でユーザーが 簡単に使用できるように 用意された、複数コン ポーネントに使用される デフォルトのパスワード	`\${DEFAULT_PASSW ORD}`
	GIT_HOOKS_DIR	git フックに使用する ディレクトリー (必要な 場合)	`\${GIT_HOOKS_DIR}`
	SSO_URL	RH-SSO URL	`\${SSO_URL}`
	SSO_OPENIDCONN ECT_DEPLOYMENT S	–	ROOT.war
	SSO_REALM	RH-SSO レルム名	`\${SSO_REALM}`
	SSO_SECRET	Decision Central RH- SSO クライアントシー クレット	`\${DECISION_CENTR AL_SSO_SECRET}`
	SSO_CLIENT	Decision Central RH- SSO クライアント名	`\${DECISION_CENTR AL_SSO_CLIENT}`
	SSO_USERNAME	クライアント作成に使用 する RH-SSO レルムの 管理者ユーザー名 (存在 しない場合)	`\${SSO_USERNAME}`
	SSO_PASSWORD	クライアント作成に使用 する RH-SSO レルムの 管理者パスワード	`\${SSO_PASSWORD}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	SSO_DISABLE_SSL_CERTIFICATE_VALIDATION	RH-SSO Disable SSL 証明書の検証	`\${SSO_DISABLE_SSL_CERTIFICATE_VALIDATION}`
	SSO_PRINCIPAL_ATTRIBUTE	ユーザー名として使用する RH-SSO プリンシパル属性	`\${SSO_PRINCIPAL_ATTRIBUTE}`
	HOSTNAME_HTTP	http サービスのホスト名。デフォルトホスト名の場合は空白にします (例: insecure- <application-name>- rhdmcentr- <project>. <default-domain-suffix>)。	`\${DECISION_CENTRAL_HOSTNAME_HTTP}`
	AUTH_LDAP_URL	認証用に接続する LDAP エンドポイント	`\${AUTH_LDAP_URL}`
	AUTH_LDAP_BIND_DN	認証に使用するバインド DN	`\${AUTH_LDAP_BIND_DN}`
	AUTH_LDAP_BIND_CREDENTIAL	認証に使用する LDAP 認証情報	`\${AUTH_LDAP_BIND_CREDENTIAL}`
	AUTH_LDAP_JAAS_SECURITY_DOMAIN	パスワードの復号化に使用する JaasSecurityDomain の JMX ObjectName	`\${AUTH_LDAP_JAAS_SECURITY_DOMAIN}`
	AUTH_LDAP_BASE_CTX_DN	ユーザー検索の開始に使用する最上位コンテキストの LDAP ベース DN	`\${AUTH_LDAP_BASE_CTX_DN}`
	AUTH_LDAP_BASE_FILTER	認証するユーザーのコンテキストの検索に使用する LDAP 検索フィルター。{0} 式を使用しているフィルターに、入力ユーザー名またはログインモジュールコールバックから取得される userDN が置換されます。検索フィルターの一般的な例は (uid={0}) です。	`\${AUTH_LDAP_BASE_FILTER}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	AUTH_LDAP_SEARCH_SCOPE	使用する検索範囲。	`\${AUTH_LDAP_SEARCH_SCOPE}`
	AUTH_LDAP_SEARCH_TIME_LIMIT	ユーザーまたはロール検索のタイムアウト (ミリ秒単位)。	`\${AUTH_LDAP_SEARCH_TIME_LIMIT}`
	AUTH_LDAP_DISTINGUISHED_NAME_ATTRIBUTE	ユーザーの DN を含むユーザーエントリーの属性の名前。これは、ユーザー自身の DN に正しいユーザーマッピングを妨げる特殊文字 (バックスラッシュなど) が含まれる場合に必要になることがあります。属性が存在しない場合は、エントリーの DN が使用されません。	`\${AUTH_LDAP_DISTINGUISHED_NAME_ATTRIBUTE}`
	AUTH_LDAP_PARSE_USERNAME	DN がユーザー名に対して解析されるかどうかを示すフラグ。true に設定されている場合には、DN はユーザー名に対して解析されます。false に設定されている場合には、DN はユーザー名に対して解析されません。このオプションは usernameBeginString および usernameEndString と共に使用されます。	`\${AUTH_LDAP_PARSE_USERNAME}`
	AUTH_LDAP_USERNAME_BEGIN_STRING	ユーザー名を公開するため、DN の最初から削除される文字列を定義します。このオプションは usernameEndString と併用され、parseUsername が true に設定されている場合にのみ考慮されません。	`\${AUTH_LDAP_USERNAME_BEGIN_STRING}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	AUTH_LDAP_USER_NAME_END_STRING	ユーザー名を公開するため、DN の最後から削除される文字列を定義します。このオプションは usernameEndString と合わせて使用し、parseUsername が true に設定されている場合にのみ考慮されます。	`\${AUTH_LDAP_USERNAME_END_STRING}`
	AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_ID	ユーザーロールを含む属性の名前	`\${AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_ID}`
	AUTH_LDAP_ROLE_S_CTX_DN	ユーザーロールを検索するコンテキストの固定 DN。これは、実際のロールが存在する DN ではなく、ユーザーロールを含むオブジェクトが存在する DN です。たとえば、Microsoft Active Directory サーバーでは、これは、ユーザーアカウントが存在する DN です。	`\${AUTH_LDAP_ROLE_S_CTX_DN}`
	AUTH_LDAP_ROLE_FILTER	認証済みユーザーと関連付けられたロールを検索するために使用される検索フィルター。入力ユーザー名またはログインモジュールコールバックから取得される userDN は、 <code>{0}</code> 式が使用されたフィルターに置換されます。認証済み userDN は <code>{1}</code> が使用されたフィルターに置換されます。入力ユーザー名に一致する検索フィルター例は <code>(member={0})</code> です。認証済み userDN に一致する他の例は <code>(member={1})</code> です。	`\${AUTH_LDAP_ROLE_FILTER}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	AUTH_LDAP_ROLE_RECURSION	一致するコンテキストの下で実行されるロール検索の再帰レベルの数。再帰を無効にするには、これを 0 に設定します。	`\${AUTH_LDAP_ROLE_RECURSION}`
	AUTH_LDAP_DEFAULT_ROLE	認証されたすべてのユーザーについての組み込まれているロール	`\${AUTH_LDAP_DEFAULT_ROLE}`
	AUTH_LDAP_ROLE_NAME_ATTRIBUTE_ID	ロール名を含む roleCtxDN コンテキスト内の属性の名前。 roleAttributesDN プロパティーが true に設定されている場合には、このプロパティーはロールオブジェクトの名前属性の検索に使用されます。	`\${AUTH_LDAP_ROLE_NAME_ATTRIBUTE_ID}`
	AUTH_LDAP_PARSE_ROLE_NAME_FROM_DN	クエリーによって返された DN に roleNameAttributeID が含まれるかどうかを示すフラグ。true に設定されている場合には、DN は roleNameAttributeID に対してチェックされます。false に設定されている場合、DN は roleNameAttributeID に対してチェックされません。このフラグは LDAP クエリーのパフォーマンスを向上できます。	`\${AUTH_LDAP_PARSE_ROLE_NAME_FROM_DN}`
	AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_IS_DN	roleAttributeID にロールオブジェクトの完全修飾 DN が含まれるかどうか。false の場合は、コンテキスト名の roleNameAttributeID 属性の値からロール名が取得されます。Microsoft Active Directory などの特定のディレクトリースキーマでは、この属性を true に設定する必要があります。	`\${AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_IS_DN}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	AUTH_LDAP_REFERRAL_USER_ATTRIBUTE_ID_TO_CHECK	リファール (referral) を使用しない場合はこのオプションを無視してもかまいません。リファールを使用し、ロールオブジェクトがリファール内にある場合、このオプションは特定のロール (例: member) に対して定義されたユーザーが含まれる属性名を示します。ユーザーはこの属性名の内容に対してチェックされます。このオプションが設定されていないとチェックは常に失敗するため、ロールオブジェクトはリファールツリーに保存できません。	`\${AUTH_LDAP_REFERRAL_USER_ATTRIBUTE_ID_TO_CHECK}`
	AUTH_ROLE_MAPPER_ROLES_PROPERTIES	このパラメーターがある場合には、RoleMapping ログインモジュールが指定したファイルを使用するように設定されます。このパラメーターは、ロールを置換ロールにマップするプロパティファイルまたはリソースの完全修飾ファイルパスまたは名前を定義します。形式は original_role=role1,role2,role3 になります。	`\${AUTH_ROLE_MAPPER_ROLES_PROPERTIES}`
	AUTH_ROLE_MAPPER_REPLACE_ROLE	現在のロールを追加するか、マップされたロールに現在のマップを置き換えるか。true に設定されている場合は、置き換えられます。	`\${AUTH_ROLE_MAPPER_REPLACE_ROLE}`
`\${APPLICATION_NAME}`-kieserver	WORKBENCH_SERVICE_NAME	–	`\${APPLICATION_NAME}`-rhdmcenr
	KIE_ADMIN_USER	KIE 管理者のユーザー名	`\${KIE_ADMIN_USER}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	KIE_ADMIN_PWD	試用版環境でユーザーが簡単に使用できるように用意された、複数コンポーネントに使用されるデフォルトのパスワード	`\${DEFAULT_PASSWORD}`
	KIE_SERVER_MODE	KIE Server モード。有効な値は 'DEVELOPMENT' または 'PRODUCTION' です。実稼働モードでは、アーティファクトの SNAPSHOT バージョンを KIE サーバーにデプロイできず、既存コンテナでアーティファクトのバージョンを変更することはできません (org.kie.server.mode システムプロパティを設定します)。	`\${KIE_SERVER_MODE}`
	KIE_MBEANS	KIE サーバー mbeans の有効化/無効化 (kie.mbeans and kie.scanner.mbeans システムプロパティを設定します)	`\${KIE_MBEANS}`
	DROOLS_SERVER_FILTER_CLASSES	KIE Server クラスフィルター (org.drools.server.filter.classes システムプロパティを設定します)	`\${DROOLS_SERVER_FILTER_CLASSES}`
	PROMETHEUS_SERVER_EXT_DISABLED	false に設定されている場合、Prometheus サーバーの拡張は有効にされます (org.kie.prometheus.server.ext.disabled システムプロパティを設定します)。	`\${PROMETHEUS_SERVER_EXT_DISABLED}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	KIE_SERVER_BYPASS_AUTH_USER	KIE Server による、クエリーなどのタスク関連の操作についての認証済みユーザーのバイパスを許可 (org.kie.server.bypass.auth.user システムプロパティを設定します)	\${KIE_SERVER_BYPASS_AUTH_USER}
	KIE_SERVER_ID	–	–
	KIE_SERVER_ROUTE_NAME	–	insecure-\${APPLICATION_NAME}-kieserver
	KIE_SERVER_STARTUP_STRATEGY	–	OpenShiftStartupStrategy
	KIE_SERVER_USER	KIE Server のユーザー名 (org.kie.server.user システムプロパティを設定します)	\${KIE_SERVER_USER}
	KIE_SERVER_PWD	試用版環境でユーザーが簡単に使用できるように用意された、複数コンポーネントに使用されるデフォルトのパスワード	\${DEFAULT_PASSWORD}
	KIE_SERVER_CONTAINER_DEPLOYMENT	KIE Server コンテナのデプロイメント設定。オプションでエイリアスあり (形式: containerId=groupId:artifactId:version c2(alias2)=g2:a2:v2)	\${KIE_SERVER_CONTAINER_DEPLOYMENT}
	MAVEN_REPOS	–	RHDMCENTR,EXTERNAL
	RHDMCENTR_MAVEN_REPO_ID	–	repo-rhdmcentr
	RHDMCENTR_MAVEN_REPO_SERVICE	–	\${APPLICATION_NAME}-rhdmcentr
	RHDMCENTR_MAVEN_REPO_PATH	–	/maven2/

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	RHDMCENTR_MAVEN_REPO_USERNAME	EAP 内の Decision Central がホストする Maven サービスにアクセスするためのユーザー名	\${DECISION_CENTRAL_MAVEN_USERNAME}
	RHDMCENTR_MAVEN_REPO_PASSWORD	試用版環境でユーザーが簡単に使用できるように用意された、複数コンポーネントに使用されるデフォルトのパスワード	\${DEFAULT_PASSWORD}
	EXTERNAL_MAVEN_REPO_ID	maven リポジトリに使用する id (設定されている場合)。デフォルトはランダムに生成されます。	\${MAVEN_REPO_ID}
	EXTERNAL_MAVEN_REPO_URL	Maven リポジトリまたはサービスへの完全修飾 URL	\${MAVEN_REPO_URL}
	EXTERNAL_MAVEN_REPO_USERNAME	Maven リポジトリにアクセスするユーザー名 (必要な場合)	\${MAVEN_REPO_USERNAME}
	EXTERNAL_MAVEN_REPO_PASSWORD	Maven リポジトリにアクセスするパスワード (必要な場合)	\${MAVEN_REPO_PASSWORD}
	SSO_URL	RH-SSO URL	\${SSO_URL}
	SSO_OPENIDCONNECT_DEPLOYMENTS	–	ROOT.war
	SSO_REALM	RH-SSO レalm 名	\${SSO_REALM}
	SSO_SECRET	KIE Server RH-SSO クライアント名	\${KIE_SERVER_SSO_SECRET}
	SSO_CLIENT	KIE Server RH-SSO クライアント名	\${KIE_SERVER_SSO_CLIENT}
	SSO_USERNAME	クライアント作成に使用する RH-SSO レalm の管理者ユーザー名 (存在しない場合)	\${SSO_USERNAME}

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	SSO_PASSWORD	クライアント作成に使用する RH-SSO レルムの管理者パスワード	`\${SSO_PASSWORD}`
	SSO_DISABLE_SSL_CERTIFICATE_VALIDATION	RH-SSO Disable SSL 証明書の検証	`\${SSO_DISABLE_SSL_CERTIFICATE_VALIDATION}`
	SSO_PRINCIPAL_ATTRIBUTE	ユーザー名として使用する RH-SSO プリンシパル属性	`\${SSO_PRINCIPAL_ATTRIBUTE}`
	HOSTNAME_HTTP	http サービスルートのカスタムホスト名。デフォルトホスト名の場合は空白のままにします (例: insecure- <application-name>- kieserver-<project>. <default-domain-suffix>)。	`\${KIE_SERVER_HOSTNAME_HTTP}`
	AUTH_LDAP_URL	認証用に接続する LDAP エンドポイント	`\${AUTH_LDAP_URL}`
	AUTH_LDAP_BIND_DN	認証に使用するバインド DN	`\${AUTH_LDAP_BIND_DN}`
	AUTH_LDAP_BIND_CREDENTIAL	認証に使用する LDAP 認証情報	`\${AUTH_LDAP_BIND_CREDENTIAL}`
	AUTH_LDAP_JAAS_SECURITY_DOMAIN	パスワードの復号化に使用する JaasSecurityDomain の JMX ObjectName	`\${AUTH_LDAP_JAAS_SECURITY_DOMAIN}`
	AUTH_LDAP_BASE_CTX_DN	ユーザー検索の開始に使用する最上位コンテキストの LDAP ベース DN	`\${AUTH_LDAP_BASE_CTX_DN}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	AUTH_LDAP_BASE_FILTER	認証するユーザーのコンテキストの検索に使用する LDAP 検索フィルター。{0} 式を使用しているフィルターに、入力ユーザー名またはログインモジュールコールバックから取得される userDN が置換されます。検索フィルターの一般的な例は (uid={0}) です。	`\${AUTH_LDAP_BASE_FILTER}`
	AUTH_LDAP_SEARCH_SCOPE	使用する検索範囲。	`\${AUTH_LDAP_SEARCH_SCOPE}`
	AUTH_LDAP_SEARCH_TIME_LIMIT	ユーザーまたはロール検索のタイムアウト (ミリ秒単位)。	`\${AUTH_LDAP_SEARCH_TIME_LIMIT}`
	AUTH_LDAP_DISTINGUISHED_NAME_ATTRIBUTE	ユーザーの DN を含むユーザーエントリーの属性の名前。これは、ユーザー自身の DN に正しいユーザーマッピングを妨げる特殊文字 (バックスラッシュなど) が含まれる場合に必要になることがあります。属性が存在しない場合は、エントリーの DN が使用されます。	`\${AUTH_LDAP_DISTINGUISHED_NAME_ATTRIBUTE}`
	AUTH_LDAP_PARSE_USERNAME	DN がユーザー名に対して解析されるかどうかを示すフラグ。true に設定されている場合には、DN はユーザー名に対して解析されます。false に設定されている場合には、DN はユーザー名に対して解析されません。このオプションは usernameBeginString および usernameEndString と共に使用されます。	`\${AUTH_LDAP_PARSE_USERNAME}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	AUTH_LDAP_USER_NAME_BEGIN_STRING	ユーザー名を公開するため、DN の最初から削除される文字列を定義します。このオプションは usernameEndString と併用され、parseUsername が true に設定されている場合にのみ考慮されます。	`\${AUTH_LDAP_USER_NAME_BEGIN_STRING}`
	AUTH_LDAP_USER_NAME_END_STRING	ユーザー名を公開するため、DN の最後から削除される文字列を定義します。このオプションは usernameEndString と合わせて使用し、parseUsername が true に設定されている場合にのみ考慮されます。	`\${AUTH_LDAP_USER_NAME_END_STRING}`
	AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_ID	ユーザーロールを含む属性の名前	`\${AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_ID}`
	AUTH_LDAP_ROLE_S_CTX_DN	ユーザーロールを検索するコンテキストの固定 DN。これは、実際のロールが存在する DN ではなく、ユーザーロールを含むオブジェクトが存在する DN です。たとえば、Microsoft Active Directory サーバーでは、これは、ユーザーアカウントが存在する DN です。	`\${AUTH_LDAP_ROLE_S_CTX_DN}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	AUTH_LDAP_ROLE_FILTER	認証済みユーザーと関連付けられたロールを検索するために使用される検索フィルター。入力ユーザー名またはログインモジュールコールバックから取得される userDN は、{0} 式が使用されたフィルターに置換されます。認証済み userDN は {1} が使用されたフィルターに置換されます。入力ユーザー名に一致する検索フィルター例は (member={0}) です。認証済み userDN に一致する他の例は (member={1}) です。	`\${AUTH_LDAP_ROLE_FILTER}`
	AUTH_LDAP_ROLE_RECURSION	一致するコンテキストの下で実行されるロール検索の再帰レベルの数。再帰を無効にするには、これを 0 に設定します。	`\${AUTH_LDAP_ROLE_RECURSION}`
	AUTH_LDAP_DEFAULT_ROLE	認証されたすべてのユーザーについての組み込まれているロール	`\${AUTH_LDAP_DEFAULT_ROLE}`
	AUTH_LDAP_ROLE_NAME_ATTRIBUTE_ID	ロール名を含む roleCtxDN コンテキスト内の属性の名前。roleAttributelsDN プロパティが true に設定されている場合には、このプロパティはロールオブジェクトの名前属性の検索に使用されます。	`\${AUTH_LDAP_ROLE_NAME_ATTRIBUTE_ID}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	AUTH_LDAP_PARSE_ROLE_NAME_FROM_DN	クエリーによって返された DN に roleNameAttributeID が含まれるかどうかを示すフラグ。true に設定されている場合には、DN は roleNameAttributeID に対してチェックされます。false に設定されている場合、DN は roleNameAttributeID に対してチェックされません。このフラグは LDAP クエリーのパフォーマンスを向上できます。	\${AUTH_LDAP_PARSE_ROLE_NAME_FROM_DN}
	AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_IS_DN	roleAttributeID にロールオブジェクトの完全修飾 DN が含まれるかどうか。false の場合は、コンテキスト名の roleNameAttributeID 属性の値からロール名が取得されます。Microsoft Active Directory などの特定のディレクトリースキーマでは、この属性を true に設定する必要があります。	\${AUTH_LDAP_ROLE_ATTRIBUTE_IS_DN}
	AUTH_LDAP_REFERRAL_USER_ATTRIBUTE_ID_TO_CHECK	リファラール (referral) を使用しない場合はこのオプションを無視してもかまいません。リファラールを使用し、ロールオブジェクトがリファラール内にある場合、このオプションは特定のロール (例: member) に対して定義されたユーザーが含まれる属性名を示します。ユーザーはこの属性名の内容に対してチェックされます。このオプションが設定されていないとチェックは常に失敗するため、ロールオブジェクトはリファラールツリーに保存できません。	\${AUTH_LDAP_REFERRAL_USER_ATTRIBUTE_ID_TO_CHECK}

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	AUTH_ROLE_MAPPER_ROLES_PROPERTIES	このパラメーターがある場合には、RoleMapping ログインモジュールが指定したファイルを使用するように設定されます。このパラメーターは、ロールを置換ロールにマップするプロパティファイルまたはリソースの完全修飾ファイルパスまたは名前を定義します。形式は original_role=role1,role2,role3 になります。	`\${AUTH_ROLE_MAPPER_ROLES_PROPERTIES}`
	AUTH_ROLE_MAPPER_REPLACE_ROLE	現在のロールを追加するか、マップされたロールに現在のマップを置き換えるか。true に設定されている場合は、置き換えられます。	`\${AUTH_ROLE_MAPPER_REPLACE_ROLE}`
	FILTERS	–	AC_ALLOW_ORIGIN,AC_ALLOW_METHODS,AC_ALLOW_HEADERS,AC_ALLOW_CREDENTIALS,AC_MAX_AGE
	AC_ALLOW_ORIGIN_FILTER_RESPONSE_HEADER_NAME	–	Access-Control-Allow-Origin
	AC_ALLOW_ORIGIN_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Origin 応答ヘッダーの値を設定します (CORS サポートに役立ちます)。	`\${KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_ORIGIN}`
	AC_ALLOW_METHODS_FILTER_RESPONSE_HEADER_NAME	–	Access-Control-Allow-Methods
	AC_ALLOW_METHODS_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Methods 応答ヘッダーの値を設定します (CORS サポートに役立ちます)。	`\${KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_METHODS}`

デプロイメント	変数名	説明	値の例
	AC_ALLOW_HEADERS_FILTER_RESPONSE_HEADER_NAME	–	Access-Control-Allow-Headers
	AC_ALLOW_HEADERS_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Headers 応答ヘッダーの値を設定します (CORS サポートに役立ちます)。	`\${KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_HEADERS}`
	AC_ALLOW_CREDENTIALS_FILTER_RESPONSE_HEADER_NAME	–	Access-Control-Allow-Credentials
	AC_ALLOW_CREDENTIALS_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE	KIE サーバーの Access-Control-Allow-Credentials 応答ヘッダーの値を設定します (CORS サポートに役立ちます)。	`\${KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_ALLOW_CREDENTIALS}`
	AC_MAX_AGE_FILTER_RESPONSE_HEADER_NAME	–	Access-Control-Max-Age
	AC_MAX_AGE_FILTER_RESPONSE_HEADER_VALUE	KIE サーバーの Access-Control-Max-Age 応答ヘッダーの値を設定します (CORS サポートに役立ちます)。	`\${KIE_SERVER_ACCESS_CONTROL_MAX_AGE}`

4.1.2.4. 外部の依存関係

4.1.2.4.1. シークレット

このテンプレートでは、アプリケーションを実行するために以下のシークレットをインストールする必要があります。

4.2. OPENSIFT の使用に関するクイックリファレンス

Red Hat OpenShift Container Platform で Red Hat Decision Manager テンプレートをデプロイし、モニターし、管理し、デプロイ解除するには、OpenShift Web コンソールまたは **oc** コマンドを使用できます。

Web コンソールの使用に関する説明は、「[Web コンソールを使用したイメージの作成およびビルド](#)」を参照してください。

oc コマンドの使用方法に関する詳細は、『[CLI リファレンス](#)』を参照してください。以下のコマンドが必要になる可能性があります。

- プロジェクトを作成するには、以下のコマンドを使用します。

```
$ oc new-project <project-name>
```

詳細は、「[CLI を使用したプロジェクトの作成](#)」を参照してください。

- テンプレートをデプロイするには (またはテンプレートからアプリケーションを作成するには)、以下のコマンドを実行します。

```
$ oc new-app -f <template-name> -p <parameter>=<value> -p <parameter>=<value> ...
```

詳細は、「[CLI を使用したアプリケーションの作成](#)」を参照してください。

- プロジェクト内のアクティブな Pod の一覧を表示するには、以下のコマンドを使用します。

```
$ oc get pods
```

- Pod のデプロイメントが完了し、実行中の状態になっているかどうかなど、Pod の現在のステータスを表示するには、以下のコマンドを使用します。

```
$ oc describe pod <pod-name>
```

oc describe コマンドを使用して、他のオブジェクトの現在のステータスを表示できます。詳細は、「[アプリケーション変更操作](#)」を参照してください。

- Pod のログを表示するには、以下のコマンドを使用します。

```
$ oc logs <pod-name>
```

- デプロイメントログを表示するには、テンプレート参照で **DeploymentConfig** 名を検索し、以下のコマンドを入力します。

```
$ oc logs -f dc/<deployment-config-name>
```

詳細は、「[デプロイメントログの表示](#)」を参照してください。

- ビルドログを表示するには、テンプレート参照で **BuildConfig** 名を検索し、以下のコマンドを入力します。

```
$ oc logs -f bc/<build-config-name>
```

詳細は、「[ビルドログへのアクセス](#)」を参照してください。

- アプリケーションの Pod をスケーリングするには、テンプレート参照で **DeploymentConfig** 名を検索し、以下のコマンドを入力します。

```
$ oc scale dc/<deployment-config-name> --replicas=<number>
```


詳細は、「[手動のスケーリング](#)」を参照してください。

- アプリケーションのデプロイメントを解除するには、以下のコマンドを使用してプロジェクトを削除します。

```
$ oc delete project <project-name>
```

または、**oc delete** コマンドを使用して、Pod またはレプリケーションコントローラーなど、アプリケーションの一部を削除できます。詳細は、「[アプリケーション変更正操作](#)」を参照してください。

付録A バージョン情報

本書の最終更新日: 2019 年 10 月 31 日 (木)